

抵抗のストラテジー

——シンガポールの家庭で就労する外国人家事労働者——

上野加代子

要 約

本稿では、シンガポールで住み込みの外国人家事労働者として就労しているフィリピンおよびインドネシア女性の困難とそれに対する彼女たちの抵抗をインタビュー調査と参与観察から記述する。ジェイムス・スコットが小作農研究で描き出した弱者の抵抗様式の枠組みを援用し、幹旋業者、雇用者、自分の親族そして地域社会からの搾取や強要や排除に対する家事労働者の抵抗を、ペースダウンやサボタージュ、偽りの服従、常習的な着服、偽装された無知、ゴシップ、感情偽装、職場放棄などからみていく。

これらの外国人家事労働者は、まぎれもなくグローバル経済システムに取り込まれた弱者である。しかし彼女たちを単なる弱者としてではなく、パワフルなアクターとして捉えてみると、実にさまざまなアイデアを考案することで自分の安全を守り、自分や家族のために人生を切り開こうとする姿が浮かび上がってくる。

1. 本研究の目的

近年、「国際移動の女性化 feminization of international migration」という概念のもとでなされた研究が数多く行われている。もちろん、女性が出生地でない国で暮らすのは近年に特異な現象ではない。国連の移民統計によると 1960 年の時点ですでに移民の 46.7% が女性で占められている¹⁾。政治的な亡命であれ、よりよい経済機会を求めた移動であれ、国境をわたるひとたちの半分近くが女性であった。このような女性移民の典型的なプロフィールは、父親や夫という男性の扶養家族メンバーであった。

これに対して、「国際移動の女性化」として着目されるのは、ひとつには女性が海外に単身で就労する現象で²⁾、特に「労働力移動の女性化 feminization of labor migration」などと称されている。つまり、以前は一家の稼ぎ手は男性であったのだが、近年は女性が稼ぎ手として移動する傾向が強まっているのだ (Chammartin 2004)。こうした現象の内実は、出身国、民族、技能、就労許可書の種類、出入国の方法などによって階層化されている (Piper 2007)。たとえば、アジア以外の国々では、就労するのは高い技能をもった女性だという傾向があるのに対して、東南アジアでは低社会階層出身の女性の労働力移動が顕著である (Piper 2007)。フィリピン、インドネシア、スリランカでは労働者の海外移動の 60-80% を女性が占めており (ILO 2006)、彼女たちの多くが家事やケアに携わる家庭内労働者として中東やアジア地域などで雇用されている。

経済発展が遅れた国の女性が国境を越え、経済先進国で家庭内の家事やケア労働に従事する

現象について、1990年代から、グローバル経済論やジェンダー論などの枠組から活発な研究がなされてきた (Adams & Dickey (eds.) 2000, Anderson 2000,2004, Chang 2000, Constable 1997, Ehrenreich and Hochschild (eds.) 2004, Hondagneu-Sotelo 2001, Huang *et al.* (eds.) 2004, Human Rights Watch 2005, Momsen (ed.) 1999, Lan 2006, Lin 1999, Oishi 2005, Parrenas 2001, Wisuwardani *et al.* 2005)。これらの研究はいくつかの焦点をもっているが、中でも重要な焦点は、女性の国際移動の経験と男性のそれとの差異である。女性への搾取、強要、排除、被害者化などが、こうした研究の問題意識である。

女性は、家庭という閉鎖的な環境で単独で家事労働に従事することが多いために、建設現場などで集団で働くことが多い男性よりも、虐待や搾取（閉じこめ、性的虐待、長時間労働、不規則な休日）に対してより脆弱である (Chammartin 2004)。ほとんどの受け入れ国で労働法の適用がなされておらず、雇用者との関係は私的な人間関係とみなされやすい (Human Rights Watch 2005)。また自分たちの権利を代表する労働組合の組織化が困難である (Chammartin 2004)。

搾取は経済面に限定されない。たとえばホックシールドは、経済先進諸国に家事労働者やケア労働者が集中する現象を、送り出し国に対する「愛」の搾取という枠組みで捉えている。女性の国外への移動の結果、経済的發展途上地域のひとたちが使用できる愛情資源が枯渇するからである (Hochschild 2004)。

また女性の労働者移動は、本人の決定というより、グローバル経済における第三世界への構造的な抑圧の帰結であり、家父長制のなかでの強いられた決定ではないかという議論もされている。つまり、マクロ的にみると、そもそも国境を越えた地域間の労働移動が、世界銀行やIMFによる債務国への経済政策との関連で半ば強要された移動という側面がある。債務国通貨の切り下げ、多国籍企業の進出と収益の低い地元産業の切り捨てという国際機関の経済政策によって海外就労に拍車がかかった地域があるからである (Ehrenreich and Hochschild 2002, 谷口 2007)。くわえて、そのような地域における海外就労は本人の人生設計というより家族プロジェクトの様相を呈しており、送金決定権から女性本人が排除されるという家父長的作用も指摘されている (Jayatilaka 1998)。

そして、受け入れ国においては、外国人家事労働者を周辺労働者として排除し、社会の正規メンバーとして組みこませない場合が多い。この社会的排除は、自国民との結婚禁止や、特定の公共スペース利用についての暗黙の利用制限などに具現化されている (Ueno 2008a)。また出身地域や階層によれば、帰国後に地元社会からの負の烙印づけがなされる場合もある³⁾。

しかし留意すべきは、このような搾取や強要や排除に焦点をあてる研究の大半が、単に家事労働に従事する女性をグローバル経済の被害者や犠牲者として捉えるのではなく、彼女たちの主体的な側面をも描き出そうとしている点である。たとえば、香港で就労するフィリピン家事労働者の雇用者との交渉や彼女たちの抵抗 (Constable 1997)、フィリピン、インドネシア、スリランカの家事労働者が出身国のソーシャルネットワークを維持しながらシンガポールで自分たちの「故郷 home」を創造する奮闘 (Yeoh and Huang 2000)、ならびに公共スペースで服装や言語による自分たちの文化様式の表明 (Yeoh and Huang 1998)、台湾で家事や介護などの女性労働者がパブリックな場に自分たちのさまざまなスペースを作り出す試み (Wang *et al.* 2008) を

取り上げた研究がなされている。さらに彼女たちは教会や NGO に集い、仲間への支援を試みる (Constable 1997, Lin 1999, Ogaya 2004)。女性は男性に較べて、海外就労を自分の時間やスペースの獲得、経済的な向上の好機、暴力的家族関係などからの脱出と捉えていることを指摘する研究もある (Dannecker 2005, Oishi 2005)。

とはいえ、これらの先行研究は、個人が採用する様々な抵抗のストラテジーを包括的に記述したものではない。女性労働者たちを単なる弱者ではなく行動の主体として描き出すためには、個々人が編み出し採用する多様な日常の抵抗の諸相をみていくことが大切であろう。

そこで本稿では、シンガポールで働くインドネシアならびにフィリピンの家事労働者についての調査から、彼女たちが直面するいくつかの困難と、日々の抵抗の諸相を浮き上がらせたい。具体的には、シンガポールに家事労働者として移動するまでのプロセス、シンガポールで就労したあとに日常的に遭遇する典型的な搾取や強要と、それらへの各人の日々の抵抗について、参与観察やインタビュー調査などからみていく。その後の考察では、ジェイムス・スコットが『弱者の武器』で展開した、相対的に弱者とされる人々の抵抗の枠組みを援用することで、シンガポール家事労働者の抵抗の様式を分析する (Scott 1985)。

スコットは、マレーシアの小作農民たちが、自分たちを搾取しようとする資本家たちに対して行う抵抗の様式を記述している。たとえば、仕事のペースを落とすなどのサボタージュを行う、真の感情を現さずに偽装する、職場を放棄する、偽りの服従を行う、常習的な着服をする、無知を装う、中傷する、等々である。これらは、組織も資金も持たない個々の小作農民であっても容易に日常的に為しうる抵抗様式である。それゆえ、同様の抵抗様式が、家庭で長時間働き、労働者の組織化が困難である家事労働者においても観察されるのではないかと予想される。

もちろん、労働者のさまざまな行為を抵抗という観点からとらえ、それらを理想化することは慎まなければならない (Constable 1997)。また、抵抗が起こったり、起こらなかったりする文脈を詳細にみていくことも必要である (Constable 1997, Ortner 1995)。そうしたことを念頭において、本稿ではまず、シンガポールで働くフィリピンとインドネシア女性の経験をなるべく具体的にみることから始める。

2. 調査方法

本研究は、アジア家族とジェンダーやアジア女性の国際移動についての共同研究の一環である⁴⁾。本稿で使用する第一次データは、主に 2002 年から 2008 年 3 月に、著者がシンガポールとインドネシアの調査で収集したものである。合計日数で約 3 ヶ月のシンガポール滞在中、主に 3 つの家庭で、家事労働者と雇用者家族や訪問客との相互作用を参与観察した。そして、調査協力が得られた 23 人のシンガポール在住の家事労働者と 19 世帯の雇用者にインタビューを実施した。さらに、インドネシアのチラチャップで 10 名のシンガポール就労経験者女性、同国バタムで 4 名のシンガポール就労経験者から聞き取りを行った。インタビュー対象者は、フィリピン女性 13 人に対して、インドネシア女性は 24 人である。これらの女性の年齢は、調査対象時に 18 歳未満から 48 歳と年齢幅があるものの、大半が 18 歳から 30 歳前半であった。シンガポールでの就労期間については、数ヶ月から合計で約 18 年と幅があった。フィリピン女性の大半が

高校卒であるが、大卒者も含まれていた。他方、インドネシア女性のほとんどが中学卒業であり、小学校卒の女性もいた。婚姻属性はシングル、既婚、離婚、別居、死別であるが、調査対象者は20歳代が多かったため、シングルの女性が半数以上を占めていた。インタビュー対象を引きうけてくれた雇用者20名は、30代～50代であり、家事労働者雇用歴が、2年から23年で、ひとりの日本人を除き華人シンガポール人であった。以下の事例における家事労働者の年齢はインタビュー時点のもの、名前はすべて偽名である。

なお、本研究と並行して、外国人家事労働者シェルターで180人の居住者を対象に実施した就労実態の量的調査を行ったほか、シンガポールのインドネシア領事館、外国人労働者問題を扱うシンガポールのNGO、ジャカルタにある同様のNGO、ジャカルタとチラチャップのトレーニングセンター、インドネシア国内の元外国人家事労働者が入居していたシェルターへの聞き取り調査なども行った。それらの調査結果は本稿では引用しないが、著者がシンガポール家事労働者を取り巻く環境を理解する上で大いに役に立った。協力してくださった各位に感謝したい。

3. 困難と抵抗の諸相

3.1 トレーニングセンター/エージェンシー

シンガポールには17万人の住み込み外国人家事労働者が就労している。平均すると7世帯に1世帯の割合で雇用されていることになる⁵⁾。家庭内のケア・家事労働者として入国できるのは8つの指定国に限られているが⁶⁾、なかでもフィリピンとインドネシア出身者が圧倒的多数を占めている。

一般的にフィリピン女性とインドネシア女性では、入国プロセスが異なっている。フィリピン女性が観光ビザで入国し、シンガポールのエージェンシーに直接登録して雇用者宅をみつけることが少なくないのに対して、インドネシア女性のほとんどが、インドネシアでスポンサー⁷⁾からトレーニングセンターを紹介され、そこで訓練を受けながら待機し、トレーニングセンターと同じ経営のエージェンシーで雇用者が決まってから入国する。

トレーニングセンターは、短期間で大量の規格化された家事労働者を生産するための施設である。訓練内容は、語学、料理、掃除、ケア（乳児や高齢者の世話）、インタビューの練習などに区分されており、日程表に沿って流れ作業のように学習を行う。トレーニングセンターでの学習と待機は3週間から4ヶ月に及ぶ。以下では、インドネシアからの家事労働者がたどるプロセスやトレーニングセンターの実態を、インタビューを交えながら描いていくことにする。

25歳のデウィは、トレーニングセンターでの2ヶ月の滞在を「監獄のようだった」とふり返る。

近所に住む私のスポンサーがジャカルタのトレーニングセンターを知っているというので、彼に連れられて入所した。ピアスやネックレスなどは没収されると聞いていたので家に置いていった。着いた翌日、身体検査に合格すると、傍にいた訓練生に髪を短く切られた。トレーニングセンターでの研修は厳しく、日中は、皆、ユニフォームをきて英語、料理や掃除、電化製品の使用法、乳児や高齢者への世話に関する訓練を受けた。食事の量が少なく、

センターの売店でスナックを買おうにも、所持金に余裕はなかった。フィアンセと両親が遠路、面会に来たときも、1時間あわせてくれたただけだった。数週間後、パスポートの作成ではじめて外に連れ出してもらった。

トレーニングセンターの場合、入所者は、入所か退所、あるいはその両方において持ち物を調べられることになっている。各トレーニングセンターの方針や年度によって持ち物検査の内容は異なっていたが、一般的には装飾品、携帯電話、自分の家族の写真、シンガポールですでに働いている親族・知人や前雇用者の連絡先などが没収対象になる。所持品検査では、靴やブラジャーのなかまで調べられることもある。

同様の検査が、シンガポール入国の際にシンガポール側のエージェンシーでも実施される。シンガポールのエージェンシーも、基本的な生活用品の持ち込みしか認めず、彼女たちの貴重品を没収して出国まで保管するといった方法をとっているところが多い。しかし、実際は、少なくない割合で、禁止されているはずの所持品がシンガポールに持ち込まれているようである。デウィはシンガポールドル紙幣を隠し持ってシンガポールに入国した。

インドネシアのエージェンシーから、シンガポールには金品を持って入らないように言われた。でも、何かあったとき、無一文ならどうすることもできない。父親が外国にいく私のことを心配して少しのドル紙幣を持たせてくれた。私は紙幣を折りたたんで下着のゴムの部分に縫いつけ、検査をくぐり抜けた。

デウィはシンガポール 30 ドル（約 2,000 円）だけでなく、証明書サイズの子どもと夫の写真も荷物に隠して持って入った。

25 歳のラニーは、すでにシンガポール入国 3 回目のベテランで、結婚指輪を持ち込んだ。

2 年間の契約が終わって故郷に戻って、婚約者と結婚式を上げた。彼は私にすぐに子どもを産んでほしかったのだけれど、夫もジャカルタまでいかなければ仕事がないし、彼の家族と同居するのは嫌なので、家を買うためにシンガポールで再度働くことにした。結婚したばかりだったので、夫と離れるのはとても辛く、結婚指輪だけでも持っていこうと決めた。荷物検査と身体検査があるので、方法をいろいろと思案した揚げ句、生理のナプキンのなかに指輪を縫い込んだ。検査の前後、下着にナプキンをつけた。うまく検査をくぐり抜けた後、大きなため息がでた。

ラニーとデウィだけではない。他の女性たちも、前の雇用者の電話番号やシンガポールにいる姉妹の電話番号をトレーニングセンターで使用する教科書に書き込んだり、小さな紙切れにメモする方法について話してくれた。また、夫や子どもの写真を財布や鞆底に隠したというひとたちもいた。

トレーニングセンター / エージェンシーの仲介プロセスにおける最大の問題は、労働契約が明確にされていないことが多い点である。「労働契約書を見たことがない」、「契約書の説明が実

際と異なっていた」,「スタッフの口約束は嘘だった」といった事態がインドネシア女性だけでなく、フィリピンからエージェンシーを経由した入国の際にも頻繁に生じている。また給与支払いの延滞なども、少なからぬ頻度で起こっている。労働条件や賃金をめぐるトラブルについては、女性たちの間では一般的に、「どうしようもない」「私たちになにができるのか」と受け止められている。とはいえ、それでも彼女たちは、悪口でエージェンシーの評判を落とし、自分たちのネットワークを利用し情報を集めて次の入国の際には比較的評判の良いトレーニングセンターやエージェンシーを探そうとする。あるいは、シンガポール滞在中に自力で次の雇用者を探し、仲介者を介さないよう説得するという方法も取られている。

3.2 雇用者

トレーニングセンター/エージェンシーだけでなく、雇用者も家事労働者の所持品にさまざまな制約を加えることがある。貴重品の紛失を防止するという名目で、採用した際にパスポートやビザだけでなく時計などの貴重品を預かる雇用者がいる。30歳のフィリピン出身のマリアは、雇用者宅に到着した日にお気に入りの腕時計を雇用者に取り上げられた。

自分の腕時計を長い間みていない。この家のマダムが、私の仕事に必要なないので紛失しないよう保管すると言った。腕時計は私のパスポートと一緒に金庫に入っているのだろうと思う。私には管理できないということらしい。この家の中学生の娘は自分で腕時計を持っているというのに。

マリアは2年近く雇用者宅で働いているが、時計を返してもらいたいと言い出すことができない。関係を悪くしたくないからである。

雇用者による所持品管理の真の目的が、家事労働者の逃亡防止だということは見やすいであろう。なかには、給料を2年の契約が満了するまで本人に支払わず取り置く雇用者もいる。所持金や貴重品が手元ないことは逃亡の大きなハードルになることは言うまでもない。

持ち物で雇用者がもっとも警戒するのは、携帯電話である。注意散漫になり仕事に差し障りがでるといった理由で、購入や所持を禁止する雇用者は少なくない。しかし、それにもかかわらず、インタビューしたすべてのフィリピン女性が携帯電話を保有していた。

28歳のシャロンは、新しい雇用者宅に移ったばかりである。前の雇用者宅では、ベッドのマットレスの下に携帯電話を隠していた。裏庭の野菜を吊すバスケットのなかに隠しているフィリピン女性もいた。また、シャロンの友達にはチェストの引き出しに下着にくるんで隠していたという。また、雇用者から携帯電話所持の疑いが何度となく掛けられていた女性は、ほとぼりが醒める間の数日間、隣家の家事労働者に預かってもらう、ということを繰り返していた。

携帯電話の入手は、フィリピン女性よりインドネシア女性のほうが困難である。フィリピン女性は月に1～2回以上の休日を取るのが一般的であるが、インドネシア女性が雇用されるときは、休日がないという取り決めがなされることがある。外出する機会がなければ、携帯電話の購入が難しくなる。しかし、そのような状況でも携帯を入手しようと試みるのである。

ラニーの働き先の斜め向かいに外出を許可されていないという噂のインドネシア女性がいた。

彼女が外出する唯一の機会は、毎朝ゴミを門の前に出し、家の前の落ち葉を掃除するときである。ある日、雇用者の義母がいないすきに、ラニーが状況をきいた。数週間後、彼女は使い古しの携帯を自分の友達から借りて、さらにこの女性に貸し出した。

雇用者による制約は所持品の制限だけではない。たとえば、家事労働者の監視のために室内に監視カメラを隠して設置する雇用者がいる。家事労働者は、雇用者が不在のときにも気を抜くことができないのだ。

しかし、このカメラも考えられているほどの効果をもたないことがある。フィリピン女性のジェーンは2年の契約を終え帰国する際に、彼女の代わりに来る女性に5日間ほど引き継ぎをしなければならなかった。その間に、家事や介護のやり方、雇用者が好きな料理、家族メンバーの性格や癖、仕事の手の抜き方法を新入りに教えた。その引き継ぎの一環として、ジェーンは新入りが「良い性格の持ち主だと思った」ので最終日にカメラの設置場所を伝達した。

勿論、監視カメラを設置している家は少なく、より一般的な監視方法は抜き打ちチェックである。50歳代の雇用者はその利点を次のように説明する。

わが家のインドネシアからのメイドは良い人だ。こういうことがあった。家族でオーストラリアに行ってきた。メイドに知らせていた予定より1日早く帰国したが、家に着くと床にモップかけの跡があった。ときどき抜き打ちチェックをしてみないと彼女たちの本当の働きぶりは分からないと思う。

この雇用者は普段から、家族旅行の帰国日や時間の変更などを家事労働者に連絡しないことにしている。しかし実は、このインドネシア女性は、雇用者の親類宅で働く家事労働者から携帯メールで帰国予定日の変更を教えてもらっていたのである。

その他、雇用者による制約として、家事労働者の食べ物を制限している家庭がある。家事労働者を「家族の一員」とみなす雇用者は少なくないが、その一方で、家事労働者の食事内容に目を光らせている場合が多い。24歳のフィリピン女性ルビーの次の話はこの矛盾をついたものである。

常日頃、私は雇用者から「あなたは家族の一員」と言い聞かされている。雇用者は来客に対しても「彼女は私たち家族の一員」だと私を紹介することがある。確かに早朝から深夜まで四六時中、妻や義母と一緒に家族のようである。毎日、くたくたになるまで家族の世話をしていて、月に1度の休日でも家の掃除や洗濯を終えてから外出する。義母からはいつも見張られていて、緊張の連続だ。義母の機嫌が悪いときには「あなたは愚かだ」とあたられる。先日は、冷蔵庫に入っていた傷みかけのフルーツを食べたら、義母は血相を変えて私を罵った。

食べ物については、冷蔵庫のなかの高価なフルーツや残り物のケーキの処分が争点になる。家事労働者は、新しいものには手を付けないが、古くなりかけたときに、処分するタイミングが難しいという。早すぎると「無くなった」と驚いた表情をされてしまう、傷むと「もったい

ないことをして」と咎められる。

また、特定のものを食べないように指示する雇用者もいる。ある雇用者宅では、家事労働者はお肉を食べてはいけないことになっていた。以前にそこで働いていたフィリピン女性のスーザンは、いつも料理をつくるときにつまみ食いをしていた。ある日、鶏を揚げながらいつものように口に入れようとしたら、雇用者の義母が突然台所にやってきた。彼女はあわてて、ズボンのポケットに唐揚げを隠し、大やけどをした。

シンガポールにおいて一般に家庭は安らぎと休息のプライベートな領域と位置づけられているが、見てきたように、家事労働者にとっては長時間労働と緊張を強いられる場なのである。勤務時間は、「朝6時から夜の9時頃まで」などと決められることが多い。しかし、麻雀などの来客で就寝が深夜になることもある。

とはいえ、そのような状況においても、上手に休憩をとっている場合がある。30歳のインドネシア女性のタニーは、月に1度の午後が休日というペースで働いている。3階建ての庭付きの家と、その家族の世話をひとりで切り盛りしている彼女は、日々の過ごし方について筆者に説明するなかで、手の抜きの方法に言及した。

タニー：トレーニングセンターで家事の方法を学びましたが、私自身もいくつか発明しました。

インタビュアー：たとえばどんなことですか？

タニー：私は上手にベット・メイクができると思います。それはとても素敵で、トレーニングセンターが教えてくれたやり方とは違うのです。(中略) 朝は、コーヒーと新聞を夫妻のベットまで運び、それから、マダムの身支度を手伝い、彼女の髪をドライヤーでセットします。夜の就寝前はマダムのためにお茶とお酒をベットのそばまで持って行きます。

インタビュアー：とても忙しそうですね。

タニー：いいえ、そうでもないのです。マダムも働いているので、夫妻は私が実際に働いている場面を一部始終みているわけではないのです。この家は夫妻の扱い方のコツが呑みこめたら、それほど大変ではないのです。ポイントをおさえることが大切です。掃除は2時間以内に終えます。マダムが職場から戻ってきて、部屋や綺麗に片づいていて、芸術的作品のようなベット・メイクをみたら、それだけで十分満足げなのです。

この雇用者宅夫婦の勢力構造は妻優位である。したがって、妻を満足させ、彼女のタニーへの依存度を高めていくことが重要になる。タニーは、自分の雇用者宅でのサバイバルのために、雇用者家族のプライバシーには全く関心がないというそぶりをみせながら、夫婦の勢力構造、それぞれの性格特性をいち早く学習していく。嫌みや叱責を受けても、「わかりました、奥様 Yes, ma'am」と鼻歌を歌っているように返事をするのである。

多くの家事労働者は、朝の支度を終え、夫婦や子どもを送り出してから、しばしの情報交換の時間を楽しむ。雇用者が出かけた直後の朝、絶妙なタイミングを狙っているかのように、雇用者宅の固定電話が一斉に鳴りだす。この光景は、携帯電話が家事労働者の間で一般的に使用されはじめるようになって少なくなったものの、まだ観察される。携帯は通話料が高いため、

雇用者の電話を借用しているのである。雇用者が休暇をとって平日に家にいるといった日課の変更がある場合、友人に携帯メールで「家の電話にかけてこないように」と即座に連絡をまわす。「妻が夫を怒鳴った」「娘が親に反抗している」「夫の恋愛で夫婦がもめた」など雇用者家族のゴシップが、家事労働者を通して外部に伝わっていく。

雇用者による制約の最たるものは、外出禁止であろう。インドネシア出身の労働者には外出禁止を言い渡されているケースが多い。名目は、「彼女の利益のため」である。50歳代の華人雇用者は次のようにいう。

メイドは外に出さない。悪い友達や男性や賭け事に影響されるから。彼女は仕送り目的でシンガポールに働きに来ている。遊びに来たわけではない。悪い友達に影響されてお金が無くなったメイドは大勢いる。妊娠したら送還され、当初の目的を全うできないことになる。

別の華人女性雇用者はインドネシアの家事労働者が休日に外出して、気分がムラができるのが嫌で、休日を渡さないようにしたという。

彼女の機嫌が悪いので、私たちの言ったことで気分を害したのか思った。気分が沈んでいたり、仕事に気持ちが入っていなかったということもある。そういうことがときどきあったので話をきくと、友達関係でトラブルになっていたらしい。外出するからそういうことになる。私たちは、本心は毎週でも彼女に休日を渡してあげたい。でも、外のことを家に持ち込まれると困ってしまう。

外出を制限しようとする雇用者と家事労働者との間には、攻防戦が展開されることになる。休日を与えない雇用者に対して、「親が病気になったのですぐに送金をしに銀行にいかなければならない」「シンガポールに叔父が来ている。両親へのプレゼントを叔父に預けたい」と応酬する。雇用者も「一体、何人の叔父や叔母がいるのだろうか」と訝しがりつつも、「家族」「親族」を持ち出されると弱腰になりがちである。25歳のフィリピン女性、ジェニーは「親の入院」と「家の火事」を理由に、給与を前借りして契約途中に一時帰国まで成し遂げた。

給与前借りが必要であるのは、出身国のエージェンシーを経由してシンガポールに入国した女性は通常、最初の4ヶ月から11ヶ月の間、給与が支払われないからである。その間、雇用者から月に10ドルから30ドル（700円～2,000円）を「小遣い」として渡され、そのなかでやりくりするのである。当然、家族に送金もできず、彼女たちはお金が必要になれば、子どもの学費、親の医療代、借金があれば金利分の支払いなどを雇用者に前借りする。

前借り返済期間が過ぎても給料日に給料を支払わない雇用者もいる。35歳のフィリピン女性は、最初の給料日に給与が渡されなかったときの戸惑いを次のように述べている。

私は内心、とても不安で仕方なかった。一週間待った。しかし雇用者は給与のことに何ら言及しなかった。私は勇気を振り絞り、息子の写真をマダムにみせて、ここではあなたの二人の子どもたちを世話しているが、私も自分の国ではこの子の母親であると言った。緊

張のあまり声が震えていたと思う。私の家族は仕送りがなければ生活できない、と涙ながらに嘆願した。

このように、家事労働者は弱者やイノセンスを武器にすることもあるわけだ。

このような劣悪な条件におかれても、通常、家事労働者は雇用者を変えることはできない。家事労働者が契約満了時まで雇用者宅を辞める場合は1-2ヶ月の給料に相当する額のペナルティをエージェンシーに支払う仕組みになっており、これが家事労働者側からの雇用者の選択を強く抑制している。他方、雇用者はかなり自由に家事労働者を交換することができる。シンガポールではエージェンシーが交換プランを提供しており、雇用主はわずかな費用か、全く追加費用がかからずに家事労働者を交換できる (Ueno 2008a)。

そうした状況にあって、23歳のインドネシア女性マニセンは、自分の「学習能力のなさ」を武器として、雇用者宅を上手に辞めることができた。

雇用者と雇用者の親の家での2カ所での家事仕事と、残り物の食事で我慢ならず、どのようにこの家を出るかを思案していた。自分が訓練不能なほど不器用だと思われたら、エージェンシーに返されるのではないか。以前に一度、自分から雇用者宅を辞したとき、エージェンシーの担当者から「あなたの親はそれほど裕福なのか」「バタムにいきたいのか」⁸⁾などと罵倒され、ひどく傷ついた。高価なカップを割ったことはいまから考えると愚かな行為だった。でも、そのときはそれしか方法がないと思っていた。雇用者が大切にしている紅茶カップセット一式のなかからおそろおそろカップをひとつ取り出し大理石の床に落とした。もやもやした気持ちがふっきれて、気分がスカッとした。カップが割れたら芝居ではなく本当に泣けてきた。

3.3 親族

彼女たちは受け入れ国においてのみ搾取されているわけではない。シンガポールでの就労歴8年のアジスは、「私が抱えるトラブルのほとんどは、インドネシア側で起こっている」と言い切った。故郷の親族が時に搾取者として立ち現れることがあり、彼女たちは親族に対しても交渉や抵抗を行わなくてはならない。

女性の出稼ぎ問題でしばしば言及されているのが、家庭内での暴力や夫の飲酒やギャンブル癖が海外へ出稼ぎのプッシュ要因になる点である (Gamburd 2001, 2004, Oishi 2005, Piper 1997)。前述したインドネシア女性、デウィの夫は、酒癖が悪く、頻繁に彼女に暴力を振っては謝るということを繰り返している。

妊娠してお腹が大きいときに蹴られたのが暴力のはじまりだった。お酒を飲んで機嫌が悪くなるとすぐに私に当たる。ある日、耐えきれなくなって、下の子どもを連れて実家に戻った。もう一人の息子は置いていくように義母に命じられた。父親や妹からは、夫と離婚したほうが良いと言われている。夫からは、離婚したら殺すと脅されている。どうして良いのか分からない。以前から知り合いだった男性が、私に好意をもってくれているので、そ

のひとに連絡したら、親身になって相談に乗ってくれた。私と子どもたちの世話をしたい、とも言われた。彼はいまマレーシアで働いている。彼が良い性格の持ち主であるかを帰国までに見極めたい。彼とメールで密に連絡したいので、マダムに携帯を買うお金を借りた。

彼女は、夫が暴力を振るい、夫に定職がないので子どもを養うためシンガポールに来たが、その間にインドネシアに送金しながら、後ろ盾になってくる次の男性を探している。雇用者には携帯の購入は夫と連絡を取るのに必要だと説明しているが、彼女にとっては静かに進行中の離婚計画の一環である。

親族とのトラブルで暴力よりも一般的なのは、絶え間ない送金の依頼や物の無心である。故郷の親族への経済援助や贈り物のため、送金手続きや買い物に走り回っている女性たちがいる。23歳のインドネシア女性リリックは、すでに再婚した母親の家族のために給与のほとんど全てを渡しているのに、さらに前借りをするように催促されている。また、インタビューしたなかに、週末の朝に雇用者宅の固定電話に電話をかけて緊急送金を依頼する親を嘆く家事労働者がいた。雇用者夫婦が電話で起きてしまい、彼女の立場が悪くなるからだ。週末の朝に電話をかけないように言っているのに、親は状況を理解しようとしないう。この女性によると、親は自分がどのような苦勞をしてここまでできたのか、またどのような働き方をしているのか、考えも及ばないらしい。

親だけではなく、叔父や叔母などの親族のなかにも、気軽に無心するひとたちがいる。23歳のインドネシア女性、スティナは、腕時計を無心する親族について途方にくれた様子であった。

叔父と叔母は、シンガポールに行くが決まったら、セイコウの腕時計を持って帰ってほしいと言った。普通なら、「良い雇用者に恵まれるといいね」とか、「身体に気を付けて」と言うのではないか。7ヶ月後にやっと休日をもらった。ブギスの時計店にいった、セイコウの腕時計をみて泣いてしまった。こんなに高いものをどうして気軽に催促するのか。私がインドネシアのトレーニングセンターとシンガポールの雇用者宅で、これまでどのような苦勞をしてきたかに思い馳せることがどうしてできないのだろうか。

この種の故郷の親族からの無心に対しては、いくつかの抵抗のストラテジーがある。22歳のインドネシア女性は、頻繁の送金依頼にすっかり嫌気がさして、かなりの部分を自分で使ってしまったらしい。

故郷では家族や親戚は皆親しい。とても友好的な人たちだ。しかしお金になれば話は別で、兄と姉がいるのに、親にお金を出すのはいつも年下の自分になる。いま、自分はとても無駄遣いをしていると思う。休日にショッピングにいくと手に取った物が全部欲しくなる。物を欲しがるとこの手が憎い。でも、すごく気持ちがいい。自分のためにお金を使うと、本当にいい気持ちになる。

家事労働者が自分ために買い物をするのは、親族や雇用者からは、浪費だと受け止められ

てしまう。しかし、この女性からすると、自分で稼いだお金を自分のために使うという、至極当たり前の権利行使なのである。

このような直接的な行動以外の方法として、一時帰国せずにシンガポールで働き続けるという方法がある。通常、大きなプレゼントやお小遣いを親族に渡すことになるのは、2年の契約が終了した時点での一時帰国である。そのときには、家の改修費用の支払い、バイクや親族へのプレゼントの購入など出費が待っている。したがって、浪費ないように帰国を控えるという選択をするのだ。

次に、自分のために土地や家を買うことで自分のお金を自分の資産として残すという方法がある。独身者にとって、今後の人生を独立して送っていく上での最初の大きな出費のひとつは土地の購入である。しかしそれは、自分自身の資産を確保しておくための手段でもあるのだ。「土地を買わなければ、この4年間の給料は全部（親族に渡ってしまっ）てなくなっていただろう」と言う女性がいた。既婚者や結婚を間近に控えたひとの場合は、土地の次に来るべき大きな出費として家の購入をあげる場合が多い。家の購入もまた、自分の稼ぎを自分の資産として残すための有力な選択肢のひとつである。ラニーは次のように述べている。

フィアンセはいますぐに帰って来てほしいと言うのだけれど、夫の家族と同居しても、なにも良いことはない。シンガポールに4年いて、（故郷に）土地を買った。土地で残しておかなければ、親族へのプレゼントなどで、お金はあっというまになくなってしまふ。私はあと数年ここにいて、自分たちが住む家を購入しようと考えている。

3.4 地域

シンガポールでは、外国人家事労働者を雇う雇用者の管理責任は、法律に明確にされている。滞在中の妊娠に対しては、雇用者への罰則が設けられているのがその一例である。しかし、家事労働者に対する地域の制約という観点からみて重要であるのは、雇用者だけではなく、雇用者宅を訪問する親類や知人の訪問者もまた、外国人家事労働者の一挙一動に強い関心を持っているという事実である。訪問客は、その家で働く家事労働者を「さぼっていないか」「メイドの英語で、子どもの英語が変になっていないか」「派手な服をきていないか」「妊娠していないか」など、自分の家に家事労働者がいれば比較しながら、実に細かくチェックしている。

訪問者だけではない、近隣をはじめとした地域の人たちが、彼女たちに好奇の眼差しを注いでいる。そして家事労働者が若ければ、性的関心の対象にもなりやすい。25歳のインドネシア女性、エトリは、タクシーでの経験を次のように想起している。

私はタクシーには一人で乗らない。以前、休日に帰りが遅くなったので、もよりの駅からタクシーを拾った。運転手からとてもいやらしいことを言われ続けた。本当に恐ろしかった。途中で飛び降りようかと思った。私たちメイドは警察に通報しないとでも思っているのだろうか。

外国人家事労働者は、電車とバスで移動するものとされている。したがって、エトリがタクシー

に乗ったことが、男性運転手に生意気な女性と受け止められたのかもしれないとエトリは考えている。このような地域社会の好奇や監視の眼差しを、シンガポール就労歴が8年に及び、インドネシアに帰国しているアトン自身も、滞在中に経験した。

公団の階下の空き地で知り合いのメイドと長話をしていたら、近隣のひとが雇用者に電話したようで、夜、マダムから注意された。またある時は、高層の公団住宅の駐車場で男性と立ち話をしていたら警察がきて、雇用者の家にすぐに戻るように言われた。近所のフィリピンのメイドも、海岸で男性労働者と親しげに腕を組んで歩いていたら、警察に何をしているのか質問された。

このように、家事労働者にはプライベートの時間はなく、四六時中雇用者宅で働いているべきだと考えられている。それ以外の場所でのそれ以外の行為は、「メイドにふさわしくない」とされてしまう。「公共の場を汚していないか」、「わがもの顔で場所を占領していないか」、「男性と遊んでいないか」、何千もの目が彼女たちの言動や行動に注がれているのである（Ueno 2008a）。周囲の「メイドにふさわしい行為であるか」という眼差しには、当の本人たちも敏感で、高級店でウインドーショッピングをする、高級ホテルのトイレを借りる、といったちょっとした行動でさえも差し控えられることがある。休日は、ショッピングセンターではなく、時折、橋の下で「パーティ」をするインドネシアの家事労働者たちがいた。ひとの目に触れにくく、にわか雨を防げる場所を「占領」しているのである。

ところで、シンガポールで家事労働者として働く女性は、雇用者やマスメディアをはじめとする地域の人たちからメイドと呼ばれているが、フィリピン女性の間では、別の呼称が好んで用いられている。フィリピンのイロイロ市出身の25歳の女性は次のように述べている。

筆者：皆さんが集まったらどのように自己紹介するのですか？

フィリピン家事労働者：私たちはDHと呼び合うのです。

筆者：DHというのは何ですか？

フィリピン家事労働者 Domestic helper のことよ。

筆者：では、あなたたちのことを domestic helper と呼んでもいいですか？

フィリピン家事労働者：いいえ、DHです。

筆者：じゃあ、Domestic Helper でしょう？

フィリピン家事労働者：いいえ、DHよ。

筆者：なぜDHと略するの？

フィリピン家事労働者：そのほうがクールだから。

「DH」は、支配文化によって外から押しつけられる「メイド」というネガティブなラベルに對抗して、彼女たち自身があみだした、自尊心を向上させるストラテジーとみなすことができるかもしれない。

4. 考察

4.1 「商品」の抵抗

国家や資本主義者が欲しいのは「労働者」であるが、実際のところかれらが獲得するのは「人間」である。この『労働力』と『個性をもつ人間』との間の緊張は、外国人家庭内労働者をめぐる、とくに顕著である (Anderson 2000:108)

外国人家事労働者は、グローバル経済において、実質的に「商品」として扱われている (Anderson 2004)。インドネシアのトレーニングセンターは、ベルトコンベヤーのように、数週間で、冷蔵庫や洗濯機や掃除機の使用経験のない女性を近代的な家電が設置されている家庭で就労可能な家事労働者に仕立てあげる。その過程で持ち物を剥奪し、「個性をもつ人間」の部分をそぎ落とそうとする。しかも「雇用者」の節で見たように、シンガポールでは家事労働者のチェンジは実に容易である。つまり買い手にとって容易に返品可能な商品なのだ。家事労働者は、いわば大量生産され大量消費される工業製品のような扱いを受けているといっても過言ではない。

シンガポールは、タイなどで就労する多くの違法外国人家事労働者と違って、国をあげて家事労働者の入国政策をとってきた。合法労働ゆえに、労働者の「品質管理」がより厳しいという面がある⁹⁾。家事労働者の初回シンガポール渡航には、英語の入国テストが課せられている。合格しなければシンガポールでは就労できない。雇用者には家事労働者の監督義務が課せられており、彼女たちが妊娠や逃亡などに至った場合、雇用者に罰則が課せられる。入国から出国に至るまで、システムティックに品質管理されているのである。

他方、家事労働者本人には契約内容などが十分に知らされていない場合がほとんどである。「商品に自己決定権はない」と言ったら言いすぎだろうか。また、家事労働者を「家族の一員」と位置づける雇用者も多いが、結局のところそれは家族の行うべき仕事の押し付けや長時間労働の口実として機能している。その証拠に、「家族の一員」と言いながらも家事労働者を外出させなかったり食事内容に目を光らせたりする雇用者がいることを見てきた。雇用者は、あの手この手で家事労働者の仕事量を増やし賃金を据え置くことで単位時間当たりのコストを下げようとする (Pratt in collaboration with the Philippine Women Center 1999)。

そして、本稿の冒頭で述べたように、外国人家事労働者は、シンガポール国民との結婚禁止や特定の公共スペース利用についての暗黙の利用制限などによって社会的な排除を受けている。

こうした「商品」扱いの疎外状況のなかにあって、外国人家事労働者の日常的な交渉や孤軍奮闘は、「抵抗」と呼ぶのにふさわしいものである。彼女たちは、「個性をもつ個人」としての尊厳を回復するために、日々過酷な戦いを続けているのだ。

グローバル経済の中にあって、同様の「商品たちの抵抗」は世界中で遂行されている。たとえばロメロは、アメリカにおけるメキシコ系女性労働者を調査し、労働市場で家事労働者が自らの価値を引き上げるための戦略を紹介している。一言で言うと、自分の仕事を自分でコントロールする手段を得ることが必要なのだ。具体的な戦略としては、①仕事の柔軟性への機会を増やす。②給与と手当を増やす。③仕事内容を明確にする契約を確立する。④雇用者との接触を減らす。⑤自分たちを専門的なハウスキーパーとして定義する。⑥小規模ビジネスのような

環境を創造する、といったことである（Romero 1992）。また、香港における家事労働者を研究するコンスタブルは、雇用者に対して自分の権利を主張していくという抵抗の様式を観察している（Constable 1997）。

しかし、彼らがアメリカや香港で観察した戦略は、シンガポールの家事労働者にとってはほとんど採用不可能な方法ばかりである。第一に、アメリカや香港では休日や政治活動の自由が法的に保障されているが、シンガポールの場合、政治的自由は、自国民においてさえ、事実上存在しない。それゆえ、労働組合のような組織を前提とする方法（ロメロの①, ②, ③やコンスタブルのような権利主張行動）は取れないし、経済活動の自由と資本を必要とする⑥も不可能だ。第二に、アメリカでは住み込みではなく通勤する家事労働者がほとんどだし、香港では住み込みが多いものの少なくとも通勤するという選択肢がある。それに対してシンガポールの外国人家事労働者は100パーセント住み込みである。それゆえ、④も非現実的である。かろうじて、⑤「自分たちを定義する」という戦略が、自らを「DH」と呼ぶ行動と類比的だといえる程度である。

残念ながら、アメリカや香港で有効な戦略のほとんどは、シンガポールの外国人家事労働者が直面する問題に対して即時的に対応可能な方法ではないようだ。

それに対して、冒頭で言及したスコットのマレーシア小作農の研究は、組織も資金も持たない個々の小作農民にも容易に日常的に為しうる抵抗様式なのであった（Scott 1985）。それゆえ、シンガポールの家事労働者においてもそれと類似した抵抗様式が見られるのではないかと予想したのだが、ここまで紹介してきた事例から、そうした予想が正しいものであったということができよう。本稿で見てきた家事労働者たちの行動が、スコットがあげる、ペースダウンやサボタージュ、偽りの服従、常習的な着服、偽装された無知、ゴシップ、感情偽装、職場放棄といった様々な抵抗の諸相と大きな類似性を持つことは明らかである。

家事労働者は、雇用者のいない時間帯に、電話や立ち話に興じ、また雇用者の目にとまる仕事を完璧にこなし、ほかの部分は仕事の手を抜く（サボタージュ）。雇用者の自分への接触を増やし依存度を高め、監視のチェックを甘くする。監視カメラの前では、カメラの存在に気付いていないふりを演じる（偽りの服従）。雇用者の小言や嫌みに対してウオークマンで耳をふさぐかわりに、まるで映画の役者になったかのように「はい、マダム」と声高らかに暗誦し、自分の本当の感情を偽装する（感情の偽装）。自分が作った料理は、自分のものであるがごとく誇りをもって着服する（常習的な着服）。そして、ゴシップで雇用者やエージェンシーの評判を落とし（ゴシップ）、雇用者と無駄な話し合いをするかわりに無能を装い（偽装された無知）、雇用者がエージェンシーに戻すということで合法的な職場から脱出する（職場放棄）。

彼女たちの抵抗作戦は、こうしたスコットの戦術にとどまるものではない。暴力を振るう夫にはシンガポール滞在中に離婚計画を進め、金品を無心する親族には土地や家を購入することで自分の資産を蓄え、自分の買い物で散財してしまう。そして、休日には、ショッピング・モールの前や橋の下を占拠する。メイドという地域社会からの呼び名に対しては、DHの呼称を普及させる。

これらはすべて目立たないテクニックである。雇用者やエージェンシーと直接対決するというより、日常的には明確な対立を避けながら、公の見えている部分では計算された従順さを貫

徹させる。彼女たちの使用するストラテジーは、決して誉められたものではないだろう。ましてや歴史に残るような抵抗運動ではない。しかし、異国の地で、底辺労働者として生き抜く女性にとって、手軽で、日々、利用可能な抵抗の技法なのである。

4.2 ネットワークの活用

本稿でみてきた抵抗のストラテジーは、組織に頼らずに、基本的にはひとりで出来るものばかりであった。シンガポールの家事労働者たちは、外出もままならず、組織的な抵抗活動を行うことができない。しかも雇用者やエージェンシーは、住み込み家事労働者のネットワーク形成を阻もうとする。労働者の間に緊密なネットワークが作られると、外国人を雇った意味がないからである。たとえば、国内労働者であれば子どもが病気になったら休むだろうが、外国人労働者であれば子どもは故国に残しているのだから仕事を休むわけではない。つまり、外国人労働者であれば、自分たち家族の世話に専従させることができるのだ (Anderson 2000)。雇用者にとって家事労働者は長時間労働者であるにとどまらず、「常時、利用可能」(Anderson 2004: 107) であることが求められている。

それゆえにこそ、外国人労働者の「輸入」に際して、彼女たちと縁のあるひととの切り離しがシステマティックに行われるのである。まずは入国時において、故郷の家族や親族との関係があるものを持ち物検査で没収する。就業後は、外出や携帯電話を禁止してシンガポールでのネットワーク形成を阻もうとする。

そうした状況にあっても、彼女たちはインフォーマルなネットワークを最大限に利用し、自分の雇用者の動向、将来の雇用者候補の情報などについてネットワークのメンバーから情報を得ている。彼女たちは、必要なときは、各々の大使館やシンガポール人材省、外国人労働者支援の NGO にコンタクトし情報を集めるのである¹⁰⁾。

また、トレーニングセンターやエージェンシー、さらには雇用者さえも、常に対決する相手というわけではない。それらは彼女たちのネットワークの一部だという見方もできる。実際、シンガポールでの就労を希望する女性の少なからぬ割合がエージェンシーと協力して、パスポートを入国可能年齢に達するよう偽装し、雇用されやすいよう職歴などを変更する。同様に、彼女たちのなかには自分のネットワークに以前の雇用者も含めていこうという志向がみられた。雇用関係が解消した後も、クリスマスや誕生日、正月にメールや電話で挨拶をし、関係の維持に努める。そのことでトレーニングセンターやエージェンシーを経由せずに評判の良い雇用者を自分や自分の友達・親族のために紹介してもらうことが可能にもある。

前節で、「DH」という呼称の使用はロメロの戦略の⑤と類比的だと述べたが、ネットワーク作りという観点でいうならば、こうした呼称の使用は些細なことではない。

ハーヴィ・サックスは、「ティーンエイジャー」という呼称と「ホットロダー」という呼称との違いに着目し、後者を「自己執行カテゴリー」として分析した (サックス 1987)。「ティーンエイジャー」は、大人が彼らを若者を自分たちの枠内で管理しようとして名付けた言葉であるのに対し、「ホットロダー」は若者が自ら編み出した言葉である。同様に、「メイド」、あるいは政府の使用する「フォーリン・ドメスティック・ワーカー Foreign Domestic Workers」やその省略形である「FDW」という名称は、支配者側の目線から家事労働者を管理しようとする言葉であるから、労働者本人の自尊心を高めるも

のではないだろう。他方、「DH」は「ホットロダー」と同様、フィリピン家事労働者自身によって定義され、執行されているカテゴリーであった。

そして、ひとりだけではDHのカテゴリーは定着しない。インタビュアーである筆者にも、自分たちをDHだと主張することで、DHの呼称を受け入れ、使用するひとびとのサークルを広げようとしている。自己執行カテゴリーが通用する範囲が拡大することは、彼女たちの自己執行権が拡大することにつながることなのである。

5. おわりに

以上みてきたように、シンガポールで家事労働者として就労するインドネシアやフィリピン出身の女性は、法的・制度的に作り上げられた厳しい抑圧や搾取の構造にさらされている。しかし、彼女たちを単にグローバルエコノミー犠牲者とみなすことは、彼女たちを運命に対して抗することができない無力で弱い存在として規定することにつながる。さらなるスティグマを強化するという点で、二重のビクティマイゼーションとして作用する。なにより、それは彼女たちの人生設計や苦難な状況で編み出すサバイバルのストラテジーを看過させてしまう。現に、家事労働者たちは、家事やケアの労働に必要な技能だけではなく、雇用者やエージェンシー、そして自分の親族や地域社会に対抗するストラテジーも習得している。それらのストラテジーは仲間から受け継がれ、またときには自分自身で編み出されていた。彼女たちは「弱者」や「犠牲者」のポジションさえも資源として活用し、雇用者からの処遇に抗しているのである。

ゴードンは、アメリカの生活保護史の研究書『自分の人生のヒーローたち』のなかで、貧困者、とくに無力なシングルマザーとその子どもを、福祉機関によって介入を受けた被害者であるとみなす、定型的な語りにみられる解釈モードからの脱却を試みている。彼女は、ボストンの福祉機関のケース記録を再検討するなかで、母親が「(元)夫からの暴力」などを巧みに利用して福祉機関の担当者とのように渡り合ったのかについて論証を行った。貧困家庭の母親は単なる被害者というよりは、ときには家庭に必要な援助を引き出すために、介入の一翼を担い、その被害者ラベルを実に見事に利用する。当時のシングルマザーは、自分と子どもたちのサバイバルのために、ありとあらゆる方法を考え出していた（Gordon 1988）。

まさしくゴードンがシングルマザーを自分の人生のヒーローであると名付けた意味において――フィリピン政府が彼女たちを国家のヒーローと称揚する意味ではなく¹¹⁾――、家事労働者たちは、状況に対応するために賢く立ち回わり、自分たちの安全と将来への変化を求める長く続く闘いのヒーローなのである。

注

1) World Economic and Social Survey 2004. United Nations Publication. www.un.org/esa/policy/wess/wess2004files/part2web/part2web.pdf

2) 「国際移動の女性化」における近年にもうひとつの大きなテーマは、仲介業者を介した国際結婚である（Constable (ed.) 2005, Piper and Roces (eds.) 1997）。

- 3) たとえば、かつて英国植民地だったミャンマーでは、裕福な家は家事労働を同じ英国植民地のインドからの労働者などに依存しており、家事労働への蔑視がいまなお強いといわれる。ミャンマーで行った私たちのタイでの出稼ぎ帰国者へのインタビューでは、家事労働者として働いていた時代のことを話してもらうのは難しかった。皆、「私は靴工場で働いてきた」「果樹園で働いた」と胸を張るのである（上野 2008b）。
- 4) 本研究は、「科学研究費補助金・基盤研究 A アジア諸社会におけるジェンターの比較研究 ―日本・韓国・中国・タイ・シンガポールを対象に」（2001 年～2003 年 代表：宮坂靖子）、「科学研究費補助金・基盤研究 B アジア諸女性における主婦化の比較研究：近代化とグローバル化によるジェンダーの変容」（2006 年～2008 年 代表：落合恵美子）ならびに「科学研究補助金・基盤研究 B アジアの女性の国際移動：家事・介護労働と国際結婚において」（2007 年～2009 年 代表：上野加代子）の共同調査研究の一環である
- 5) シンガポール政府は外国人家事労働者の統計を公表していないが、いくつかの情報源によると、2007 年度には約 170,000 の家事労働者が滞在している。シンガポールの世帯数が 1,049,011（Singapore Department of Statistics 2006）であることを考えれば、世帯割合の住み込み家事労働者の雇用率は台湾や香港よりも大きい。
- 6) 現在家事労働者として入国が認められている国は、フィリピン、インドネシア、スリランカ、マレーシア、タイランド、ミャンマー、インド、バングラディシュである。
- 7) スポンサーは、家事労働者を知り合いのトレーニングセンターまで連れて行き、インドネシアを出国するまで世話をすることで、コミッションをとる。
- 8) インドネシアのバタム島はシンガポールから高速艇で 1 時間の位置にあり、売春街がある。
- 9) タイではミャンマーやラオスから不法で入国した家事労働者が多い。外国人家事労働者には独自の法的保護はなく雇用者が経営するレストランやマーケットなどでも働かされるという 2 箇所での就労がまかり通っている。しかし、雇用者やエージェンシーに対して大きな借金をかかえている女性は稀であり、雇用者が嫌ならば自分のネットワークから情報を入手し、比較的容易に別の家庭や別の仕事に移る（上野 2008b）。
- 10) 筆者がインタビューをした 2 つの外国人労働者支援団体とインドネシア大使館のホットラインには、日々、雇用者からの賃金不払いや虐待などについての相談などが相次いでいた。
- 11) 「ヒーロー」の言葉は、アキノ元大統領が 1899 年に香港で家事労働者たちに行ったスピーチで最初に出現した（Maglipon 1993）。

文献

- Adams Kathleen M., Sara Dickey. (eds.) 2000. *Home and Hegemony: Domestic Service and Identity Politics in South and Southeast Asia*. The Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Anderson, Bridget. 2000. *Doing the Dirty Work: The Global Politics of Domestic Labour*. London and New York: Zed Books.
- Anderson, Bridget. 2004. Just Another Job?: The Commodification of Domestic Labor. In Ehrenrich, Barbara and Arile Russell Hochschild (eds.) *Global Woman: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*. New York: OWL Books. 104-114.
- Chammartin, Gloria Moreno Fontes. 2004. The Feminization of International Migration. In *Migrant Workers*: 39-47. <http://library.fes.de/pdf-files/gurn/00072.pdf>
- Chang, Grace. 2000. *Disposable Domestic: Immigrant Women Workers in the Global Economy*. Massachusetts: South End Press.

- Constable, Nicole. 1997. *Maid to Order in Hong Kong: Stories of Filipina Workers*. New York: Cornell University Press.
- Constable, Nicole (ed.) 2005. *Cross-Border Marriages: Gender and Mobility in Transnational Asia*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Dannecker, Petra. 2005. Transnational Migration and the Transformation of Gender Relations: The Case of Bangladeshi Labour Migrants. *Current Sociology*. 53 (4) : 655-674.
- Ehrenreich, Barbara and Arlie Russell Hochschild. (ed.) 2004. Introduction. In Ehrenreich and Hochschild. *Global Woman: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*. New York: OWL Books. 1-13
- Gamburd, Ruth. 2001. *The Kitchen Spoon's Handle: Transnationalism and Sri Lanka's Migrant Households*. Ithaca: Cornell University Press.
- Gamburd, Michele. 2004. Breadwinner No more. In Ehrenreich and Hochschild. *Global Woman: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*. New York: OWL Books. 190-206.
- Gordon, Linda. 1988. *Heroes of Their Own Lives: The Politics of History of Family Violence-Boston, 1880-1960*. Chicago: University of Illinois Press.
- Hochschild, Arlie Russell. 2004. Love and Gold. In Ehrenreich and Hochschild. *Global Woman: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*. New York: OWL Books. 15-30.
- Hondagneu-Sotelo, Pierrette. 2001. *Doméstica: Immigrant Workers Cleaning and Caring in the Shadows of Affluence*. Berkeley University of California.
- Huang, Shirlena, Brenda S.A. Yeoh. and Noor Abdul Rathman (eds.) 2005. *Asian Women as Transnational Domestic Workers*. Singapore: Marshall Cavendish Academic.
- Human Rights Watch. 2005. *Maid to Order: Ending Abuse Against Migrant Domestic Workers in Singapore*. Human Rights Watch. 17 (10) : 1-124. <http://www.hrw.org/reports/2005/singapore1205/>
- Jayatilaka, Ramanie. 1998. Globalization and Rural Women: A Case Study of Two Villages in the District of Galle. *Logos* 36 (1).
- Lan, Pei-Chia. 2006. *Global Cinderellas: Migrant Domesticities and Newly Rich Employers in Taiwan*. Durham: Duke University Press.
- Lan, Pei-Chia. 2004. Among Women: Migrant Domestic and Their Taiwanese Employers Across Generations. *Global Woman: Nannies, Maids, and Sex Workers in the New Economy*. New York: OWL Books. 169-189.
- Lin, Chin-Ju. 1999. *Filipina Domestic Workers in Taiwan: Structural Constraints and Personal Resistance*. Master's thesis. University of Essex.
- International Labour Office (ILO). 2006. *Facts on Labour Migration in Asia*. Fourteenth Asian Regional Meeting. August.
- Maglipon, Jo-Ann. 1993. DH in HK. In *Primed: Selected Stories, 1972-1992*. Pasig. Metro Mamila: Anvil Publishing. 45-53.
- Momsen, Janet Henshall. (ed.) 1999. *Gender, Migration and Domestic Service*. London: Routledge.
- Ogaya, Chiho. 2004. Filipino Domestic Workers and the Creation of New Subjectivities. *Asian and Pacific Migration Journal* 13 (3) : 381-404.
- Oishi, Nana. 2005. *Women in Motion: Globalization, State Policies, and Labor Migration in Asia*. California: Stanford University Press.
- Ortner, Sherry B. 1995. Resistance and the Problem of Ethnographic Refusal. *Comparative Studies of Society and History* 34 (1) : 173-193.
- Parrenas, Rhacel Salazar. 2001. *Servants of Globalization: Women, Migration, and Domestic Work*. California: Stanford University Press.

- Piper, Nicola. 1997. International Marriage in Japan: 'Race' and 'Gender' Perspectives. *Gender, Place and Culture*. 4 (3) : 321-338.
- Piper, Nicola and Mina Roces. 2003. *Wife or Worker?: Asian Women and Migration*. Oxford: Rowman & Littlefield Publishers.
- Piper, Nicola. 2007. International Migration and Gendered Axes of Stratification: Introduction. In N. Piper. (ed.) *New Perspectives on Gender and Migration: Rights, Entitlements and Livelihoods*. London: Routledge. 1-18.
- Pratt, Geraldine (in collaboration with the Philippine Women Center). 1999. Is This Canada?: Domestic Workers' Experience in Vancouver, BC. In Momsen, Janet Henshall. (ed.) *Gender, Migration and Domestic Service*. London: Routledge. 23-42.
- Romero, Mary. 1992. *Maid in the U.S.A.* New York: Routledge.
- サックス, ハーヴェイ 1987 「ホットロダー —革命的カテゴリー」 ハロルド・ガーフィנקル他 山田富秋・好井裕明・山崎敬一 (訳) 『エスノメソドロジー 社会学思考の解体』 せりか書房 : 19-37.
- Scott, James C. 1985. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*. Yale University Press.
- Singapore Department of Statistics. 2006. *General Household Survey 2005, Statistical Release 2: Transport, Overseas Travel, Households and Housing Characteristics*. Release date, 28 June 2006. Singapore Department of Statistics, Ministry of Trade and Industry.
- 谷口佳子 2007. 「『開発とジェンダー』をめぐる政策と実践 —スリランカ農村女性の事例から」 宇田川妙子・中谷文美編 『ジェンダー人類学を読む』 世界思想社 : 214-239.
- Ueno, Kayoko. 2008a. Foreign Domestic Workers in Singapore. In Emiko Ochiai and Barbara Molony. (eds.), *Asia's New Mothers: Crafting Gender Roles and Childcare Networks in East and Southeast Asian Societies*. London: Global Oriental.
- 上野加代子 2008b. 「タイにおけるミャンマー出身の底辺労働者」 『M- ネット』 113 移住労働者と連携する全国ネットワーク : 20-21.
- Yeoh, Brenda S.A. and Shirlena Huang. 1998. Negotiating Public Space: Strategies and Styles of Migrant Female Domestic Workers in Singapore. *Urban Studies*. 35:583-802.
- Yeoh, Brenda S.A. and Shirlena Huang. 2000. 'Home' and 'Away' : Foreign Domestic Workers and Negotiations of Diasporic Identity in Singapore. *Women's Studies International Forum*. 23 (4) : 413-429.
- Wang, Hong-zen, Mei-yao Wu and Daniele Belanger. 2008. Hegemonic or Hidden Spaces: Migrant Workers in Taiwan's Public Space. Paper presented for ISDS, Hanoi, May 9, 2008.
- Wisnuwardani, A. Savitri, Alb. Bambang Buntoro, Mulyadi, Sri Palupi. 2005. Problems Faced by Indonesian Migrant Domestic Workers in Singapore: Data and Facts, Working Forum for the Justice of Migrant Domestic Workers (FOKER), Working Team on Information and Documentation, Institute for Ecosoc Rights.